恋愛について
「好色五人女」を参照に

三回卒　山田とし

西鶴の小説は、高校の国語の教科書に取り上げられているので、私たちは大体高校で初めて西鶴に接することになります。けれども、私が見たところでは「日本永代蔵」か「世間胸算用」の一章くらいが出ているのが普通です。これらは〝町人物〟と呼ばれているもので、西鶴のもう一つの翼である〝好色物〟のほうは、教科書には不向きと思われているのか、一つもみかけたことがありません。

数年前、熊本大学の公開講座で西鶴が取り上げられましたが、その時も「世間胸算用」でした。聴講生が一般成人であり、場所が大学であっても、やはり西鶴というと町人物が主翼になるのかな、と思った次第です。

私はこ十年余り、婦人学級で古典の講義をしてきました。殆んど既婚婦人ですが、奥さん方は「上はつれなくて」「下はえならざりける」思いを秘めていらっしゃいます。そこで、西鶴の「好色五人女」を選んでテキストにしてみましたところ、非常な共感を得たのであります。

また、ある年、県内高校の図書委員研修会で一時間の講演を依頼された時、私は思い切って恋愛をテーマに選び、おなつ清十郎の生き方を少しも潤色しないで、西鶴が描いた通りに話してみました。少々の照れ笑いや拒否反応はあるだろうと思っていましたが、何と、高校生たちは微動だにしないという感じで、真剣に聴いてくれたのです。性的情報が氾濫している中で、ほんとうは高校生たちはほんとの恋の話に飢えているのではないかと思いました。

そんなことから、私は中学生、高校生の恋愛書として、教科書にも好色物が出るようになればよいと考えるようになったのです。聞くところによると、近頃の学校では性教育というものをやっているようですが、それはいきおい、性交と妊娠の仕組みを図解することになって、いかにも動物的で、夢がありません。私は性教育よりも、恋愛教育をすればよいと思うのです。恋愛には性がつきものですし、また浪漫と美のニュアンスがつきまといますから、芸術的であり、人間らしい気持ちの中で性を知ることができます。

好色物の傑作は、彼の十一年間の作家生活のうちで、ほ

とんどが前半に書かれていますー。一作に引き続き、「好色二代男」「椀久一世物語」「好色五人女」「好色一代女」と次々に好色の世界を書き表わして行ったのは、西鶴の実際の年齢はどうであれやはり若々しいエネルギーと、人生に対するフレッシュな興味を抱いていた、青年期であったからだといえます。そこが婦人や高校生の共感を得る理由の一つであろうと思います。

さて、「好色五人女」の女たちには、私は大層親近感を覚えます。それは彼女たちが町人の娘だからです。経済社会である現代の私たちは、貴族でもなければ武家でもなく、まぎれもない町人でありますから、生活の様式が近いわけです。平安貴族の恋愛のように、引歌を入れた後朝の歌を取り代わしたり、召使いや月が介在したりはしません。親や周囲の知らぬところで個人と個人が直接ぶつかり合い、享楽的な宴会や旅行もし、女が出入りできる場所、つまり密会のチャンスをうまくつかむことも、現代の女性と似ています。小説の構成や文章表現のところどころに中世の名残りがみられるとしても、主人公たちの生活感覚は、すでに近代性をもっております。

「好色五人女」は、五巻。それぞれ独立した物語ですが、五巻で一つの作品です。

巻一から巻四まではこぞって悲劇。そのうち、巻二、巻三は人妻の恋ですから、男女ともに死刑。それを挟んで巻一と巻四は、男女双方初恋で、巻一は男が死刑になり女は十六で出家、巻四は女が死刑になり男は十六で出家と相似形をなしています。

第一話から第四話までがあまりにも哀れ深く、無常でありますので、第五話は喜劇風に仕立てて、めでたしめでたしで終わる、というスタイルになっているのです。しかし、これらはすべて実在のモデルがあったようで、巻五にしても、実際は放浪の末に心中をしたらしく、これも悲劇なのです。

五つの物語がわかりやすいように、一覧表を作ってみました。

その表をみてまず目につくのは、彼女たちの年齢の若さです。おなつ十六、お七十六、おまん十六。この三人は年齢が明記してあります。おさんは、十三、四で今小町という評判が立って、器量好みの、少々年の多い大経師屋が見染めて妻に貰い、それから三年ほど経た、となっておりますので十七くらいでしょうか。おせんだけがちょっとはっきりしないのですが、十四のときに町家へ仲居奉公に上がり、今ではこの屋になくてはならない使用人になったとあり、樽屋がおせんに恋をしているとわかったとき、ご隠居が「せんも縁附ごろなれば」といっています。そして結婚して今は子供が二人生まれている、となっていますので、それらを元にして推定すれば二十三、四、五かと思われます。そしておせんは五人の中で例外的に高年齢なのです。女の恋をする年齢は、十六、七というところでしょうか。（勿論、数え年です）

〔表一〕好色五人女一覧

	第一話	第二話	第三話	第四話	第五話
名前	おなつ 清十郎	おせん （樽屋）	おさん （大経師） 茂右衛門	お七 吉三郎	おまん 源五兵衛 （若衆） （若衆）
年齢	十六 十九 （二十五） ？	推定二十二～二十五、六 老人	十七、八 二十すぎ 位か	十六 十六	十六 二十六
結末	出家 死刑	自殺後死刑 死刑	死刑 （女中も死刑） 死刑	死刑 出家	結婚 巨萬の財産を継ぐ
密会の場	花見の小袖幕の内 一回	自宅 （夫、子供と同室） 〇回	自宅 （女中の部屋） 逃亡先の丹後で半年	お寺 自宅 二回	山中の草庵 流浪で半年
恋の期間	花見の宴～ 四月十八日	御所柳の頃～ 正月二十二日	影待五月十四日 （正月か） 花の頃逃亡 九月二十二日	正月十五日～ 四月はじめ	十月～ 初夏の頃
種別	初恋 遊蕩の後、素人娘との初恋	意趣返しの恋 姦通	遊びから恋 まちがえて交情、後恋	初恋 初恋 （但し念者あり）	若衆を装って 押しかけの恋 男色
身分	但馬屋妹 手代。元酒造家息子 （姫路）	樽屋女房 子供三人有 麹屋 （大阪）	大経師屋妻 手代 （京都）	八百屋娘 寺の若衆 （江戸）	琉球屋娘 薩摩武士 （鹿児島）

〔表二〕好色五人女

巻一	姿姫路清十郎物語
巻二	情を入し樽屋物がたり
巻三	中段に見る暦屋物語
巻四	恋草からげし八百屋物語
巻五	恋の山源五兵衛物語

井原西鶴

浮世草子作家

寛永十九年（一六四二）　元禄六年（一六九三）

〔表三〕西鶴主要作品年表

作品名	出版年	作者年齢
好色一代男（処女作）	天和二年	四十一歳
好色五人女（六作め）	貞享三年	四十五歳
好色一代女	〃	〃
本朝二十不孝	〃	〃
男色大鑑	貞享四年	四十六歳
日本永代蔵	元禄元年	四十七歳
世間胸算用	元禄五年	五十一歳
西鶴置土産	元禄六年	五十二歳

（二十六作の中）

次に恋の期間をみると、これも大層、びっくりするほど短い。二ケ月か二ケ月半ばかり。第三話と第五話は逃亡、放浪の期間があるので長くなりますが、それでも半年です。まあ、これくらいが恋の持ち時間なのでしょう。

ただ、西鶴は数字を非常にリアルにはっきり書く一面、前後の数字が合わない、ひどく無神経なところがありますから、注意が必要です。例えば第一話、清十郎が勘当されておなつの家に奉公人として入ったのは十九歳。その年おなつ十六歳、としてあるのに、駈け落ち事件と盗みの嫌疑で清十郎が死刑になるところでは「哀や二十五の四月十八日に其身をうしなひける」と、二十五歳と書いてあります。が、おなつのほうは「十六の夏衣けふより墨染めにして」と、依然として十六なのです。こんなところは、前後と照らし合わせながら、語呂合わせ、または間違いであろうと思われるほうを消してゆくわけです。季節の上でも同様のことがいえます。

次に恋の種別ー種別という言葉が適当かどうか迷うのですが、男女関係はいずれも同じことのようですが、事情はさまざまです。

五人のうち、おなつ、お七、おまんの三人は娘で、全くの初恋。おさん、おせんは人妻ですが、自分から選んだ恋という意味ではこれも初恋といえましょう。これに対して、相手の男たちはどうかというと、「初恋」といえばいえるかもしれませんが、女たちのように純粋一途ではありません。

第一話の清十郎は十四の時から色道に身をなし、室津の遊女八十七人に逢はざるはなしという道楽息子で、勘当された身です。素人娘との関係ではおなつが初めてというにすぎません。両方一目惚れの初恋は第四話だけですが、その吉三郎とても、男色道の誓いを立てている兄分があったのです。第五話の源五兵衛に至っては完全な男色家で、二人までも若衆を愛し、その二人が早死にしたので出家していたほどの男です。そんな彼を一途に愛するおまんは若衆姿になって庵に忍んで行き、誓いを立てさせてから女を表わし、男は止むなくおまんと共寝するという話ですから、その誠意のほどはわかりません。

おなつ、お七の恋は代表的な恋といえましょうか。おなつは花見の宴の日に、ただ一度清十郎と密会しただけなのですが、燃え上がった情熱は、清十郎の刑死で狂乱となり、やがて落ち着きをとり戻すとちょうど百日目に出家してしまい、ひたすら清十郎を弔うのです。長生きをしてありがたい比丘尼になったといいますが、さりとは哀れな恋の結末です。またお七は、吉三郎に今一度逢いたいばっかりに自宅に放火をする。その罪で火刑に処せられるのですが、市中引き回しの間、少しもやつれることなく、いよいよの時、心中少しも動揺しなかったといいます。「櫓お七」など、日舞にもなって、人々に強い感銘を与えているようです。

おなつもお七も、恋を親きょうだいに打ち明けていません。相手の男は独身で、身分も相応な者ですから、周囲が

時期を見計らって世話をすれば、めでたく結婚できる相手なのです。それをなぜ打ち明けなかったのか、という問題がここに出て来ます。

ではその前に、ここで題に使われている好色という言葉を考えてみましょう。

西鶴が最初に使用した「好色一代男」の「好色」は、一人の男が不特定多数の相手と性の関係を持つことをいいます。しかも子を持たず、育てることをしません。「好色五人女」の女たちは、そういう好色な女だったでしょうか。いいえそうではなく、一人の男への恋に殉じた女たちです。そうすると、ここでは「好色」といっても、その意味は現代でいうところの「恋愛」に当たると考えられます。

では、恋愛とはどういうものかというと、特定の男と特定の女との、一対一の男女関係です。その恋が純粋であれば、二人の間に何物も介入することはできません。恋は本質的に、他を拒絶する性質を持っているわけです。親も、名誉も、社会制度も、法律もないのです。いい換えるなら、完全な恋は必ず家族に迷惑をかけ、周囲の平和を破壊し、反社会的行動をとらずにはおきません。しかも、逢えばそこには必ず性の行動が伴います。もし、社会的規制や道徳で制約をしなかったならば、恋が社会をめちゃくちゃにしてしまうに違いありません。

お七にとっては吉三郎に逢うことがすべてであるのです。町内が再び火事になれば彼に逢える、と考えます。両親が恥をかこうが、自分自身が火刑になろうが構わないのです。これを「何と浅果かな女」と嘲笑するのは恋を知らぬ人のいい草です。

ちょうどここのところを婦人学級でやっていたとき、一人の奥さんが「それはいとうもと子さんみたいなのでしょう」といいました。はて、誰だったかなと思ったら、例のコンピューターを不正操作して何億円かを男に渡して、世間をあっといわせた女のことでした。なるほど、放火とコンピューターと、時代により手段は異なりますが、他の迷惑は何とも思わず、男と二人きりの世界に走ろうとした心は同じです。これが恋というものですし、恋とは一面汚ないものであります。恋は罪悪ではないのですけれども、ともすれば犯罪か死が友だちとして待っています。

私たちは「好色五人女」に描かれる、このような情熱的な女たちに強い憧れを抱きます。なぜなら、多くの人たちは、安定した結婚の方を選んで、恋はほどほどに済ましているからです。火のように燃えて滅んでゆく恋には、憧憬と羨望を禁じ得ません。

とはいえ、結婚必ずしも恋の避難所ではありません。

おせん、おさんは、家計簿もかっちりつけて、町内でも評判の良妻ぶりを発揮していたのです。なぜならこういうしっかり者が、いわゆる姦通事件といわれる事件を起こしたのでしょうか。二人には共通点がありました。それは男の方から恋われて結婚したという点です。

おさんはまだ若過ぎて、女として目覚めていないうちに結婚しております。夫が江戸出張の間、実家から頼りにな

る若者茂右衛門を貸してくれるのですが、おさんはこの男と年齢的に似合うわけです。影待ちの遊びの夜、女中と入れ替わって寝ていようなど、表面の意識では茂右衛門をからかおうという遊びでしたが、意識下ではすでに彼に恋慕していたと思われます。

それまでは主婦の義務として家事を努めていた、可愛い妻でしかなかったおさんが、ここに至って、女に目覚め、この恋に生死を賭ける決心をします。つまり、おさんは自分の意志で男を選んだのです。にわかに大胆不敵になり、五百両の大金を持ち出し、茂右衛門と偽装心中をして人々を欺き、丹後の山奥へ逃亡するのですから、恋の前には、結婚の囲みももろくも壊れてしまいます。結婚が防御にならないどころか、自宅というのが意外に密会の場所として好都合であるともいえるのです。

おせんの場合はまた非常に変わったケースです。これは夫と子供二人が寝ている長屋の一間で起きた事件です。その日は女正月で、遅くまで宝引き網で遊んできたおせんが、長左衛門を引き込んで不義密通に及ぼうとしたのを夫に発見されたというのです。おせんはその場で胸を突いて自害したのですが、死んでも刑罰は免れられず、死骸が刑場にさらされたといいます。大阪中の市民が驚き、おせんに同情し、歌祭文にも歌われています。それによると、長左衛門が横恋慕をしていて、子供を人質にとって迫ったので止むなく承知した。そこへ夫が帰ってきたのでいい訳が立たず自害した、とおせんを被害者にしています。

しかし西鶴の解釈は全く違っていて、おせんにはおせんのはっきりした意志があった、としています。即ち、法事の手伝いに行って、納戸で菓子の盛りつけをしていたところへ、長左衛門が入ってきて、あやまって什器をおせんの頭に取り落とし、髪がほどけるという椿事が生じました。納戸から二人が出て来たのを、内儀が見て、その髪の乱れを怪しみ、人々の中で一日中罵しったので、しまいにおせんも腹を立て、「あんな女に鼻あかせん」という気になり、意趣返しに長左衛門に恋をしかけたというのです。その夜も長左衛門がついてきてしまったのであり、おせんはそのときも、それまでも密通はしていないのですが、その場の情況としては姦通と見なされてもしかたがないのです。

この話には恋に含まれる二つの要素が述べられていると思います。一つは偶然です。もう一つは女の性格です。頭に物が落ちてきて髪がほどけるというのは偶然ですが、それに男女がからむと、飛んでもない方向へ発展していきます。また、よかれ悪しかれ、おせんという女の性格は、話題の人にされるとその波に乗ってしまうというところがあります。もともと、樽屋との結婚も話題の人になったから、その話題にのぼせて結婚したのであって、樽屋を愛していたかどうかはわかりません。今度も満座の中で濡れ衣を着せられたことから、それならばと、意地になり、後では退けなくなったのです。女の恋に性格的な要素を取り入れたところが大層近代的だと思います。おせんが最も現代の女性に近いのではないでしょうか。

職人の女房になって幸せと見えたのに、物語の最後で、ほんの二、三行であっという間に悲劇にひっくり返されるのです。

こういうことが起こり得るから、同時代の儒者貝原益軒は、女は四十歳になるまでは、法事など人の集まる場所へは出るな、といって戒めたのでしょう。

五人の女のうち、三人が刑死、一人が出家に終わり、悲しい結末でありますが、何かしらロマンがただよい、救いが感じられるのは、相手の男たちが最後まで女についてきており、女を裏切ったり、棄てたりはしていないからです。いたずら男の長左衛門さえ同じ刑場の露と消えているのですから、恋を全うしているわけです。女たちは勿論、自分の意志で自分の人生を選択し、自分の責任で死んで行ったのです。何という潔さでしょうか。

ところで、西鶴はなぜこういう女性を描いたのでしょうか。私はやはり男の理想として、あるいは願望としてこれを書いたのだろうと思います。

第一作の「好色一代男」で、西鶴は、現実にはあり得ない、自由な恋愛、ぜいたくな遊興の世界を描きました。「たはぶれし女三千七百四十二人、少人のもてあそび七百二十五人」とあり、最後は船を作り七人の仲間と共に女護ケ島へ出帆するという、宝船に乗る七福神さながらの姿です。これは男の夢の一生であり、理想とする世界でありましょう。

けれども、好色はいくら贅を尽くしても、女とほんとの恋愛関係になったとしても、その間に金銭が介在しますので、心から女のまごころを信頼することができません。そこが完全な恋愛になり得ないところです。それで、自らの意志と責任を持ってくれる女、金銭の混じらない素人の女を求めて「好色五人女」を書いたと考えられるのです。一切を捨てて一人の男のために燃え、滅んでくれる女です。そういう意味では、男にとって素人女との恋愛は、好色の一種なのかもしれません。

そうみられても仕方のない理由として、女の年齢を大層若く設定していること。女はすべて初恋にしてあること。女に結婚を考えさせていないこと。妊娠を扱っていないこと、などが挙げられます。

また女の一途さに比べれば、男には多少のぐらつきや問題があります。偽装心中までした茂右衛門にしても、丹後から一度出て来て、未練がましく京を見に戻っています。巻五の源五兵衛は生活力もない男ですが、恋人のおまんの家に迎え入れられて、巨万の富を相続する幸運にありつきます。これでハッピーエンドかと思いきや、そのとき男はおまんと末長く幸せに暮そうとはいっておりません。これだけの財産があれば日本中の遊女を請け出してもまだ使いきれないだろう、などと思うところで終わっています。この巻五が循環して巻一へ戻りますと、蕩児清十郎につながります。こうしてまた女たちの悲劇的恋がはじまるという構成になっているのです。

更に、「好色一代女」が引き続き書かれますが、これは好色に生きた一人の女の、転落と流浪の生涯が懺悔されているのでありまして、残酷なほどの冷酷な現実が描かれています。「好色一代男」とのあまりにも明暗悲喜の対照的な描き方に驚かされるのであります。好色とは結局男の楽しみであり、夢であるようです。

たとえ、恋愛が男にとっては好色の一種であろうとも、「好色五人女」の女たちはまぎれもなく恋愛をしたのです。そして、私たちに恋愛とはこのようなものか、と教えてくれます。恋がこのように破壊力をもっているものだと知れば、恐ろしくて容易には動けなくなります。現実としては社会の道徳の規範を守って日々の生活を送り、恋愛は芸術の世界で抽象的に体験するしかない、と思うに至るわけです。

けれども、文学の中にしろ、妊娠と性病の問題を扱わなければ、ほんとうに恋愛を語り尽くしたとはいえません。西鶴のような現実主義者、日本文学では異端的存在の人でも、それをこの小説で扱っていないのは不思議に思われます。例えば、モーパッサンの短篇集を読めば、妊娠の問題はいくらでも出てくるし、性病も同様です。それがいっそう恋愛の世界を軽妙に、しゃれたものにし、あるときはそれがかえって痛烈な男への批判、皮肉となり、あるときは女がいっそう可愛いく、哀れに感じられるのです。しかし、日本文学ではそういうものを体質的に好まないようであります。私としては、リアリズムの恋愛小説としては、そこのところが今ひとつ迫力を欠く点ではないかという気がしています。